児安小学校の取組

１　はじめに

本校区は小松島市北西部に位置し，徳島市・勝浦町に隣接している。県内最大の二級河川勝浦川が流れており，南岸には田園地帯が広がる，自然豊かな地域である。

本校は，現在児童数は127名，学級数は９学級あり，年々児童数は減少傾向にある。三世代同居家族も多く，生活の中で高齢者にふれあう機会が多くある。教育熱心な土地柄で，学校への期待も高く，PTA活動も活発である。

学校教育目標「一人一人の良さを生かし，ともに伸びゆく児安の子ども～確かな学力（知）・豊かな心（徳）・健やかな体（体）」を掲げ，「あいさついっぱい　まなびいっぱい　かんどういっぱい」のスローガンのもとに，取り組んでいる。

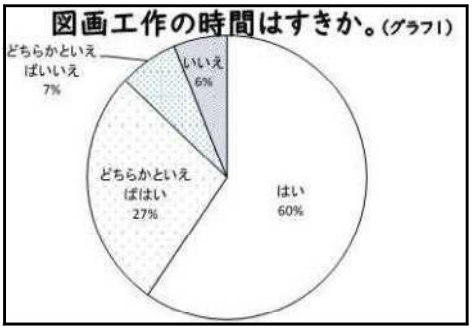
本校の児童は，明るく活動的で，のびのびと学校生活を送っている。休み時間には，大人数で集まって遊ぶことを好む児童が多く，高学年の児童は，低学年の児童の面倒をよく見ている。学習面においては，自分の思いや考えを積極的に伝えようとする児童が多い。その一方で，自分の思いを表すことに苦手意識をもっている児童もいる。失敗なく見栄えのよい結果を残すことに重きを置き，相手の意見を聞き自分の思いを深めることや，新たな考えを生み出すことについて課題であった。

こうした実態を踏まえ，一人一人の良さが生かされ（確かな学力），ともに伸びていく（豊かな心・健やかな体）ことのできる児童の育成を目指し，日々取り組んできている。

２　図画工作科における児童の実態

図画工作科の研究を進めるにあたり，全校児童を対象にしたアンケートを実施し，結果の考察から課題を把握し，実践の糸口となる資料として活用することとした。研究1年目の「図画工作科の授業は好きですか」の設問に対し，全体の87%の児童が，図画工作科の授業が好きであると回答している。（グラフ１）

授業の中でも，製作活動に没頭し，自分の感性を働かせながら，自分の思いや願いを形に表そうと納得のいくまで作品と向き合う児童の様子も見受けられる。



その一方で，図画工作が好きではないと回答した児童の理由として，「下手だから」「うまくいかないから」といったものが挙げられ，絵や立体工作の分野での強い苦手意識が覗えた。また，短絡的に自分の作品を友達の作品と比べたり，自分のイメージ通りにいかないことを「失敗」として捉えたりと，下手なことが苦手意識ややる気の低下につながっていることが，記述回答からも読み取れた。さらに，鑑賞の分野に対する興味関心の低さや苦手意識があることも明らかとなった。「友達の作品のよさがわからない」「言葉で表すことが苦手」といった，造形的な見方や考え方の部分での課題も見られ，学びが浅い段階で留まっている現状が見られた。

３　令和２年度の成果と課題及び令和３年度の副主題と仮説

令和２年度は，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた「具体的な授業構想と展開の工夫」に焦点を当てた研究を進めた。授業を構想するにあたり，表現や製作の過程，児童一人一人の思いや考えを大切にすることを意識した授業展開を図ることを全教職員が目指したのである。教材研究を通し，児童の興味関心が継続する題材構成，児童がであう材料や用具，活動場所や

環境，友達とのかかわりなど，表現と鑑賞を相互に関連させた授業展開を意識した。特に，教師も児童と同じ製作をすることで，一度発想したものでも実際の構想段階では表現することの難しさや，材料の持つ形や色，感触から広がるイメージを形にしていく奥深さを感じることができた。「うまくいかない」と苦手意識を持つ児童が，失敗への恐れや自分の作品への自信のなさを少しでも軽減することができるような，温かな学習環境作りも大切であることに気付くことができた。

表現したものを共有するために有効な手段の一つがICT機器の活用であった。発想や構想，材料や素材の選択や組み合わせといった製作過程の様子を，適宜大型テレビとつなげて映し出していった。製作過程で作品を見合う機会は，「つくり・つくりかえ・つくる」学習環境を整えることにつながっていたのである。またタブレット端末に写真や動画として保存することにより，児童の変容や学習後の評価をその都度振り返ることができ，PDCAサイクルが円滑に進められる一方策へとつなげることができた。

また，「造形遊びをする」学びは，自由に思いつくままに活動を楽しむ喜びを感じることにつながっていた。題材を通し，自然と形や色，イメージとの対話ができており，心が交流することで表現する喜びを深める児童の姿が多く見られた。

しかし，たとえ豊かな発想をしたとしても，自分の思いを表現するためには，確かな技能を身に付けさせる必要があった。授業実践の中では，材料同士をうまく接合できないことで，作品が安定せず，倒れたりこわれたりしていたことがあった。どの材質の物にはどの接着の方法（接着剤の種類）が適切であるか，教師の提示も不十分であったし，児童の経験が浅かったように感じる。技能的に必要なことは，各学年で系統立てて指導する必要を強く感じるとともに，確かな技能を身に付けていきたいと感じた。図画工作科における材料や用具を系統的に扱うことができるようなカリキュラム・マネジメントを工夫し，自分の思いを表現に生かすことのできる造形的な成功体験を重ね，学びの深まりを期待したいと考えた。

また，感じたことや思ったこと，考えたことなどを言葉で整理し表現する言語活動の充実を図ることの必要性も感じた。一面的な感想であっても，その言葉の中にある「形」や「色」，「イメージ」の持つよさや美しさが隠れていることがある。自分の思いを表現できる児童を育てるための，言語活動の充実を図りたいとも考えた。そこで，本校児童の「図画工作科がすき」という思いが，技能の向上と併せてより確かなものになるよう，副主題を「造形的な資質・能力を高め，表現する喜びが互いに感じられる授業づくり」と設定し，さらなる研究を進めていった。

図画工作科研究主題
豊かにかかわり　つながり　自らつくりだす造形活動

↓

図画工作科研究副主題
造形的な資質・能力を高め，表現する喜びが互いに感じられる授業づくり

↓

本校研究仮説
児童がつくりだす形や色，作品にこめられた思いなどのもつよさを，互いに感じ合い，伝え合う授業づくりを行うことで，より豊かな造形活動が展開されるだろう。

4　研究推進のための柱

（1）育成する造形的な資質・能力を明確にした指導計画の工夫

・指導事項の系統性を意識した題材や活動の設定
・成果や課題を次の実践につなげ，広げていく学びの展開を意識した授業づくり

（２）「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
・自分の思いや考えをもつ（自己内対話）過程の重視
・「話し方・聞き方」の定着と豊かな言語能力の育成
・意見を効果的に交流させ，新たな知を生み出す場の設定

（３）表現する喜びの自覚・共有につながる評価の工夫
・成長を振り返ることができる環境の整備
・成長を感じることができる多様な評価方法

５　育成する造形的な資質・能力を明確にした指導計画の工夫

（１）技能到達度一覧表及びスマイルこうぼう

昨年度，技能系統表をもとに，１年間の達成率を担任が評価する「技能到達度一覧表」を作成した。それぞれの学年で児童が道具をどのくらい使うことができるか，いろいろな技法をどれくらい使えるか等，スキルの到達度を記したものである。これを前担任が次学年の担任へと引き継ぎ，年間指導計画を立てる際に役立てた。表の中から，以下のような学年の課題が明らかとなった。

（例）
１年(新２年)〇色鉛筆 塗り方・・・・・・・・・・・・ 80%　枠をとらずにはみ出す
〇のり はみ出さずに塗る・・・・・・・ 70%　はしを塗れない・はみ出す
〇はさみ 紙を動かして切る。・・　・・・ 70%　紙を回せない

これらの課題を解決し，個々のスキルを向上していくことで，児童一人一人が自分の思いを楽しくのびのびと表現できるようになると考えた。

図画工作科技能到達度一覧　2年(新3年)

(%)

	番号	活用道具	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	備考
	1	クレパスのいろいろな持ち方を試し，線の太さをかえながら塗る。											○	
	2	クレパスが汚れないように考えて混ぜる。									○			指導したが個人差
	3	クレパスを紙や指でぼかす方法を知っている。											○	よくできた
	4	クレパスを絵の具ではじく方法を知っている。							○					あまり指導していない
	5	色鉛筆 ぬり方									○			濃く塗りすぎる
	6	のり 必要な量を出す。									○			出し過ぎる
	7	のり はみ出さずに塗る。								○				接このりをつけてないため，端が接着できてない
	8	木工ボンド 出し方								○				量が多すぎ
	9	木工ボンド つけ方								○				
	10	粘着テープ（ガムテープ・セロハンテープ）									○			使う機会が多かった
	11	両面テープ						○						はがせない
	12	はさみ ３つの指を使って正しく持つ。											○	
	13	はさみ 紙を動かして切る。								○				紙を回せない
	14	スポンジ												
	15	たんぽ												
	16	コンテ 指でこすってぼかす												
	17	カラーペン											○	
	18	グルーガン												
	19	ホチキス							○					
	20	カッターナイフ								○				左利きの子の対応・角度
低学年ここまで	21	段ボールカッター												
	22	ローラー												
	23	絵の具 出し方と水の量。								○				個人差あり
	24	絵の具 色をイメージしながら混ぜる。									○			
	25	絵の具 水と絵の具の分量を考え，にじみの表現を身につけている。									○			
	26	絵の具 片付け									○			時間がかかる
	27	かなづち												
	28	くぎ												
	29	くぎぬき												
	30	小刀												
	31	スポンジローラー									○			むらがある
	32	きり												
	33	のこぎり												
中学年ここまで	34	彫刻刀												
	35	化学接着剤												
	36	針金とペンチ												
	37	電動糸のこぎり												
	38	デジタルカメラ ｉＰａｄ												
	39	割ピン												
	40	はと目												
	41	はと目パンチ												
	42	液体粘土												

スマイルこうぼう実施計画　（ 火曜日　朝の活動 ）

	１年		２年	
１学期	ミニやさいずかんづくり	色鉛筆	ミニやさい図かんづくり	色鉛筆
	自分マークを考えよう	クレヨン，パス	自分マークを考えよう	クレヨン，パス
	けんをつくろう	新聞紙　広告紙	なかよしリングづくり	新聞紙
	つるをおろう	色紙	おどうぐばこづくり	牛乳パック 新聞紙
	ヒタかざりをつくろう（ちょうちん）	はさみ，のり 色紙	つるをおろう	色紙
	ふしぎなかみがた	クレヨン，パス	ヒタかざりをつくろう（天の川）	はさみ，のり 色紙
２学期	はさみでチョキチョキ	はさみ，のり 色紙	大かいじゅうのスーパー光線	色鉛筆 クレヨン，パス カラーペン
	ステキなとんがりぼうし	色鉛筆	はさみでぐるぐるすいすい	はさみ，のり 色紙
	わっかづくり（直線切り）	はさみ，のり 色紙	しゃぼん玉をかこう	コンテ 共同絵の具
			図工の実験　ふきのばし	共同絵の具
	パクパクかえる	はさみ，のり カラーペン	わっかづくり（長さを測って切る）	はさみ，のり 色紙
			ねこのドミノだおし	接着剤 はさみ カラーペン

そのスキルアップの時間として考えたのが,「スマイルこうぼう」の時間である。15分間の「朝の活動」のうち，隔週火曜日を「スマイルこうぼう」と名付け，造形的なスキルを身に付ける時間として設定した。授業で使う用具の扱いに慣れたり，材料と触れ合ったりすることで経験を重ね，授業の中で自分の思いを表現する力につなげたいと考えた。内容は，短時間でできて達成感を得られるものにした。多くの作品にふれ，見る楽しさを味わえるアートカードによる鑑賞活動も取り入れた。

第６学年では，スマイルこうぼうの時間に赤色・黄色・青色の水彩絵の具を混ぜて，12色の色をつくる活動を行った。少しずつ混ぜる量を変えると，微妙に色が変化するので，児童も興味をもって意欲的に取り組めた。同じ色でも，既製の絵の具の色とは違う個性的で味わいのある色になり，それぞれが満足のできる12色相環図ができあがった。その経験を図画工作科の授業では「いろどりいろいろ」という題材として取り扱った。まず，土，砂，チョークやクレヨンを削ったもの，おがくず，花びら等を混ぜ合わせて「絵の具」の代わりになるものをつくった。混ぜ合わせる素材によって，いろいろな色ができるので，児童はいろいろ試しながら，時間を忘れて夢中になってつくっていた。次に，つくった色を使って，黄ボール紙の上に絵を描いた。水分を含んだものを，紙を縦にして流したり，削った色を上から散らすなど，筆ではできない表現の工夫も見られた。

第１学年では，好きな色を選んだり，自由に並べることを試したりする造形遊びを行った。まず，スマイルこうぼうの時間を活用し,事前に小さな色紙を一人20枚程配り,自分の机の上で好きなように並べる活動を行った。活動に興味をもち,楽しそうに何度も机の上で色紙を並べる児童が多い中,好きな並べ方が思い浮かばず,何度も並べ直し,活動が進まない児童もいた。そのような児童に対しては,友達の並べ方を見せたり,教師と一緒に好きな色の順番に並べたりした。実際の授業では自分の好きな色や数の色紙を手に持ち,自分の机や教室の床に思い付くままに並べていくことができた。

（２）ことばであらわそう

児童が自分のイメージを表現するための言葉が思い付かず，限られた言葉になってしまうという課題から，言葉で表現する時の参考の１つとして，「ことばであらわそう」を作成した。これは振り返りカードの記入時や，鑑賞活動の際に活用している。余白を設け，本人が見つけた言葉も書き加えられるようにした。また，分類項目を「かたち，いろ，てざわり・かんしょく，イメージ」にわけ，各項目の言葉については，教職員が分担して作成した。発達段階に合わせた言葉を使うことができるよう配慮している。

特に，オノマトペを用いた表現を取り入れることで，児童は自分の中にある言葉にならない思いを言語化できる手段になっていることを感じている様子が見受けられた。言葉からイメージする思いを表現しようと試行錯誤をくり返す児童の姿も見られた。

ことばで あらわそう

かたち	いろ	てざわり・かんしょく	イメージ
1 ○○のような	1 あかるい	1 あたたかい	1 あかるい
2 ○○みたいな	2 あざやか	2 がさがさ	2 いきききとした
3 あつい	3 あたたかい	3 かたい	3 うつくしい
4 あな	4 あやしい	4 がたがた	4 おだやかな
5 うすい	5 おちついた	5 ごつごつ	5 おちついた
6 うずまき	6 かがやいた	6 ざらざら	6 おとなしい
7 おおきい	7 かすれた	7 しっとりとした	7 おげえた
8 かくばっている	8 キラキラ	8 すべすべ	8 がっしりした
9 かさなる	9 くすんだ	9 ちくちく	9 ゴージャスな
10 ごつごつした	10 くらい	10 つめたい	10 こころあたたまる
11 さんかく 三角	11 こわい	11 つるつる	11 ごちゃごちゃした
12 しかく 四角	12 さむそう	12 どっしりとした	12 さわやかな
13 するどい	13 すきとおった	13 なめらかな	13 しずんな
14 せん・ライン	14 つめたそう	14 ぬめぬめ	14 しっかりした
15 たいら	15 どんより	15 ぬるぬる	15 シンプルな
16 ちいさい	16 なつかしい	16 ぱりぱり	16 すっきりした
17 ちぢむ	17 はっとする	17 ぱりぱり	17 つよい
18 つきでた	18 ピカピカ	18 ひんやりした	18 ながれるような
19 つもる	19 ふしぎな	19 ぷつぷつ	19 はげしい
20 でこぼこ	20 まぶしい	20 ふんわりした	20 はっきりとした
21 とげとげした	21 やわらかい	21 もちもち	21 はなやかな
22 ながい	22	22 やわらかい	22 ぴったりな
23 のびる	23	23	23 ほんものような
24 ふくらんでいる	24	24	24 やさしい
25 ふとい	25	25	25
26 ほしがた	26	26	26
27 ぼそい	27	27	27
28 まがった	28	28	28
29 まるい 丸			29
30 みかづきがた			30
31 みじかい			31
32 みぞ			32
33			33
34			34
35			35
36			36
37			37
38			38

【ことばであらわそう（下学年用）】

第５学年は，「どこかにているところはないかな？」～アートカードを使って～という題材を設定し，徳島県立近代美術館よりいただいたアートカードを用いての鑑賞活動を行った。２人１組で神経衰

弱の要領で裏返しているカードを２枚選び，その共通点が言えるとカードがもらえるゲームを行った。自分がカードを手に入れるために様々な角度から作品を見つめたり，友達の視点を学んだりすることで，多角的な作品の鑑賞の仕方を学ぶ機会となった。「ことばであらわそう」の表を用いて，友達と作品を見比べ相違点を明らかにしていくことにより，作品を見る視点（形や色・イメージ）が分かるようになっていったように感じる。

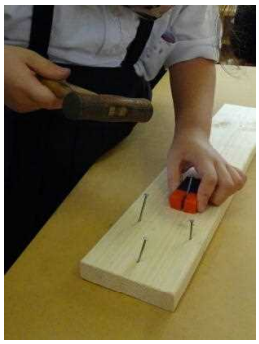
６　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

（１）主体的な学びを展開するために

①わくわく感のある題材構成

題材の把握･児童の表現したいことへの着想や発想，自己内対話や先行経験が，主体的な学びを支える大きな柱になることを実感した。そこで，第4学年では，自分で製作した用具で描くことで，作品に愛着を持つことができると思い，小刀を用いて割り箸からはしペンを作った。児童は，削り具合で様々な筆跡になっていく面白さを感じながら，自分の好みにあった線が描けるように試し書きをしながら夢中になって取り組んだ。完成したはしペンを見て，児童は早く使ってみたいという意欲が高まっていた。
また，様々な削り方をくり返し試したことにより，小刀を使うことの技能の高まりも感じられた。

②基礎的技能の向上



第3学年では板材に釘を打ち込み，ビー玉がおもしろく転がるコースを作る題材を設定した。まず，金づちによる釘打ちや釘抜きの技能の向上を図るために，木切れを使って試し打ちや試し抜きを行った。初めて金づちを扱う児童にとっては，材料や用具への不安感や恐怖心が強く，思うように釘を打ち込むことができない児童もいた。しかし，補助具としてのペンチや消しゴムによる釘の固定の仕方を提示することで，釘を打ったり抜いたりすることができる児童が増えていった。道具や用具の扱いに慣れることで，打ち込む釘の高さを変えたり，斜めに打ったりする等の発想を作品に生かそうとする児童もでてきた。

（２）対話的で深い学びを生み出すために

①表現と鑑賞の一体化

第４学年「願いの種」の題材では，自分の願いや夢からイメージした形を「種」とし，そこから伸びる「枝葉や根，茎，花や実」を，未来の自分の姿として表現した。材料からどんどんイメージを広げていく児童がいる一方で，「種」から何をどのように広げていけばいいのか，豊富な材料をどう使えばいいのか，イメージが広がらずに手が止まる児童もいたので，製作途中にミニ鑑賞会を開いた。児童は，友達の作品のいいところやまねしたいところを付箋に書いて，貼っていった。自分の作品に自信がなかった児童も，その付箋を見て，互いに嬉しい気持ちになり，さらに友達の作品からアイデアをもらうことで，自分の作品をいいものに仕上げていこうという意欲がかき立てられる場となった。

②対話の充実を目指す

第３学年の「くぎ打ちトントン，ビー玉コンコン」の題材では，学習が進んでいくと，「くぎと別の材料を組み合わせた仕掛けを作りたい」と多くの児童が感じる，材料との対話が見られた。ストローに釘をさすことや，釘にクリップを直接挟むことで，ストローやクリップを手動で回転させることに気付いた児童が出現し，グループの友達とやり方を共有する様子が覗えた。試行錯誤する中で，「真ん中の穴が大きかったら回転する」ことに気付き，それ

を全体で共有したことで，児童が思い描いたイメージに近づく作品が仕上がっていった。回転の仕掛けに気付いた児童は，２年生の生活科の学習での「おもちゃづくり」のことを思い出したと話していた。教師は児童一人一人が表したいことを適切に見取り，支援し，認めることで，これまでの経験との対話を表現に生かし，深い学びの実現につながることを実感することができた。

また，製作途中の様子をICT機器を用いて記録することで，児童は相手の表したいことや工夫に気付くことができ，活動の深まりが感じられた。児童自らが自分の好きなタイミングで写真や動画を撮ることを通し，活動を共有したり，互いのよいところを発表し合ったりする上で有効な手段となった。

７　表現する喜びの自覚・共有につながる評価の工夫

（１）縦割り班「スマイル班」での活動

本校では，１年生から６年生までの12の縦割り班(スマイル班)活動を実施している。このスマイル班では，ふるさと探検オリエンテーリング，長縄跳び（朝の活動），スマイル集会，ピカピカタイム（朝の奉仕活動）等の活動をしている。昨年度は，新型コロナウイルス感染予防のため，長縄跳びや，体育館に全校が集まるスマイル集会の活動は，ほとんどできなかった。しかし，スマイル集会の時間を活用した造形活動は，同学年ではできない異学年の友達と交流することになり，形や色，作品への思いのよさを互いに感じ合う豊かな造形活動が展開されるのではないかと考える。そこで，今年度は，感染予防のため，体育館ではなく各教室に分かれての造形活動を行うことにした。

○ ねらい

- 異学年の児童と造形活動を行うことによって，みんなでつくり，協力する喜びや，製作の楽しさを味わわせ，主体的に学ぶ力を育てることができる。
- 互いに刺激し，教え合うことで，全体的なスキル向上をねらうことができる。
- 作品を掲示，鑑賞することで，環境づくりや振り返りの場をつくることができる。

（１）－１「自分マーク」を旗にしよう

今年度スマイル班の初めての会なので，まず，顔合わせと旗づくりを実施した。これは，各班担当教員が班活動の意義指導をし，班員が自己紹介をした後，グループのめあてや約束を話し合い，旗づくりを行うというものだ。グループの旗には，班名や班員の名前等を書き，空いている所には好きな絵や模様を描いた。グループの旗づくりが終わった班から，「自分マーク」の旗づくりの活動に入った。

①ねらい

- 異学年班での造形活動に取り組み，製作する楽しさを味わう。
- 作品を互いに鑑賞し，よさや特徴を伝え合う。
- 校内や運動会の場で全員の作品を掲示することで，環境づくりや振り返りの場をつくる。

②取組の実際

○日時　　令和３年５月12日（水）２校時
○場所　　スマイル班各教室
○材料･道具　八つ切り画用紙の半分，クレパス，カラーペン，色鉛筆等，ラミネートフィルム，ロープ
○事前の活動

- スマイルこうぼうや図画工作の時間に，オリジナルの「自分マーク」デザインを考え，下描きをする。

○本時の活動

・６年生が，目的と方法について説明する。
・ 自分マークに彩色や描き加えをしながら仕上げる。
・ 仕上がった作品の工夫やよさを話し合う。

本時では，彩色や描き加えが主な作業になった。低学年は，自分の好きな物（例えば動物や乗り物，植物，食べ物等）を描く児童が多かった。中学年は，好きな物をいくつか組み合わせ，飾りや模様などを組み合わせたデザインが多かった。高学年では，幾何学的な複雑な模様を描いたり，絵の中に好きな物を巧みに入れたりするなどし，配色にも工夫が見られた。

異学年の児童の丁寧に描く姿や表現に触れながら製作することで，刺激を受け，イメージが広がり，新たに描き加える児童も多かった。前もってデザインの大まかな所は考えていたため，模倣ではなく，友達の表現のよさをマークに取り入れることができ，その結果，色や形の工夫につながり，豊かな表現ができた児童もみられた。一人一人の個性が表現された「自分マーク」となった。

○事後の活動

・出来上がった作品を，ラミネートして穴を開け，各班ごとにロープで通す。
・廊下天井から吊って掲示する。
・運動会では，テントに吊るして飾る。

○ 振り返りカードより

・はじめはすごくまよっていたけれど，すきなものを見てよく考えたら自分にぴったりのマークができたのでうれしかったです。
・自分のマークをつくりながら，わたしのマークでみんなが喜んでくれたらいいなと思いました。私のしょうらいの夢は，イラストレーターだからです。
・ちがう学年とできて楽しかったから，次もまたやりたいです。

③成果と課題

ア 成果

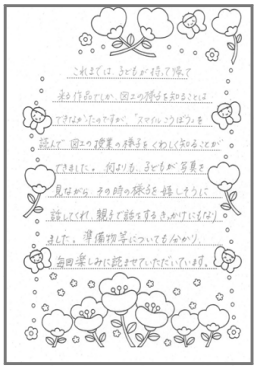
・正解のないオリジナルの自分マークを考える中で，イメージを膨らませ，自分の特徴や個性を形や色に表した作品となった。
・丁寧に彩色し，作品を仕上げることができ，技能向上につながった。
・異学年による活動で，いろいろな学年の作品を鑑賞し，刺激し合うことができた。
・全員の「自分マーク」を校内や運動会で掲示することにより，満足感を味わわせ，鑑賞の場や成長を振り返る環境の場をつくることができた。

イ 課題

・今回は白の画用紙を全員が使ったが，細かいデザインを描いている児童は，表現しやすい色鉛筆を使って描いている児童が多く，鮮明さに欠ける作品になってしまった。近くで見ると細かい所までよく描けているが，遠くから見ると，見えにくい部分があった。色画用紙を使ったり，細字のカラーペンを使うなど，材料や道具を考える必要がある。

（２）「スマイルこうぼうだより」の発行

児童が生き生きと活動する様子を保護者に伝えるために，図工だより「スマイルこうぼう」を家庭に向けて発信している。基礎的なスキル向上を目指すための朝の活動「スマイルこうぼう」や，縦割り班（スマイル班）で図画工作の活動を行う「スマイル集会」での様子を写真付きで掲載している。各時間に込められた



児童と教師の思いや願いを保護者に伝えると同時に，今後の活動で必要になる準備物のお知らせを載せ，協力を依頼している。

図工だよりを通して親とコミュニケーションを取っている児童もおり，学校からの一方的な情報提供だけで無く，親子の交流を深めるツールとしても機能している。家庭において，作品を褒めたり，製作課程の努力を認めたり，相談に乗ったりなど，対話が増えることによって，児童はより一層の達成感や充実感を感じると共に，次の作品づくりへの意欲向上に繋がった。

（３）環境整備

①学年掲示板表示

これまで仕上がった題材のみの掲示を行っていたが，作品を鑑賞する視点を示すようにした。作品の意図を付け加えて掲示することで，児童一人一人のよさや表し方の工夫がはっきりと伝わる効果がみられた。児童は掲示板の前に立ち止まっては，掲示されている友達の作品や，自分の作品を鑑賞し，次回の作品づくりへの励みにもなった。また，各学年がどのような図画工作の取り組みをしているのか，作品にこめられた思いのよさを，異学年の児童や保護者にも示すことができるようになった。

②図工室の環境整備

本校は校内事情等で図工室がなく，図画工作科の授業は教室で行われていたが，学習内容によっては，使用する際に危険を伴う用具もあるため，児童が安全に楽しく学習ができる図工室を作ることから環境整備を始めた。

ア 「いす」作り

校内研修で外部講師を招いて，教職員が保護者・児童とともに，木のいす作りに取り組んだ。大きな木の机に５～６個ずつ手作りのいすを配置できた。

イ 材料集め

材料集めは基本的には，児童がその学習活動の中で自分のつくりたいものやイメージに合わせて自分が必要だと思うものを考えて，用意をする。しかし，それだけでは量や種類が足りない場合や，児童が思いつかない材料もあり，学習活動も広がらない。そこで，全校児童や保護者に図画工作科における材料集めの意義について周知し，玄関にコンテナを置いて材料集めを行ったり，学習活動で作った材料や余った材料を整理したりして図工室に置くようにした。

ウ 材料・用具の整理

集めた材料を，種類ごとに分けてコンテナに入れ，それぞれに材料名を表示して，使いやすいように整えた。ペットボトルキャップを色別に分けたり，カップやトレイなども大きさ別に分けたりするなど，使いやすいように分類した。また用具についても，学習指導要領「第４章　指導計画の作成と内容の取扱い　２　内容の取扱いと指導上の配慮事項（６）（７）」で示された材料や用具，本校で作成した「技能系統表」，教科書に記載されている用具等を参考に，安全面に考慮して整備した。

③効果的なICT機器の活用

図画工作科におけるICT機器の活用については多岐に渡る。一人一台タブレット端末が有効活用できることで，より多くの活動に役立てることができると考える。以下は本校で，ICT機器の活用へつなげた活動の一部である。

・ 示範例を動画で撮影し，製作途中の説明を自分の見たいタイミングで見ることができた。

・ 手元の作業を大きく見せることで，用具や材料の使い方を示範することができた。

・ 製作途中の記録を児童自身がタブレット端末で記録することで，教師が評価の際にも役立てることができた。
・ 他教科と連携し，表現したものにプログラミングを組むことで，動きを可視化することができた。

（４）教師の声かけ

児童が自分の思いを表現する喜びを自覚し，新たな発想を生み出し活動していくためには，教師の目配りが大切である。第１学年の「いろいろならべて」の造形遊びでは，ペットボトルキャップの形や色から並べ方を思い付き，試行錯誤する中で好きな並べ方を見付ける活動を行った。表現過程における児童の見取りが評価と密接に関わっているので，教師の言葉かけ一つで児童のモチベーションも変わっていった。活動の様子をみていると，ペットボトルキャップの凹みを上に向けて並べている児童がいた。「なんで反対向きにしたの。」とたずねると，児童は「（反対の方が，模様がなく）色がきれいになるから。」と答えた。この短い会話の中には，材料に対する色彩感覚や，材料からイメージする自分の表現したいものへの価値付けにつながる対話的な学びが含まれている。1年生の児童にとって，自分の感覚を生かした活動を認める教師の声かけは，更に新たな発想を生み出す原動力となった。

教師の効果的な声かけや発問は，児童の活動をより面白く深める手立ての一つとして大切であることを改めて感じた。そのためには，児童の活動を的確に見取り，造形的な見方や考え方がより引き出せるような言葉を意識してかける必要がある。短い言葉であっても，状況を捉え，学習展開に近づけることのできる言葉のストックを持っておき，適宜使うことができるように，教師自らが授業における評価項目を明確にすることが大切である。作品に対して，「どうしてそうしたのか。」と聞いたり，色づかいや工夫している所など児童のよさを見取って賞賛したりすることで，相手の考えにも耳を傾け，新しい活動へと展開していくことも期待できるだろう。

８　成果と課題

（１）成果

・技能系統表をもとに，身に付いていない技能や，取り組ませたいことが明確となり，題材計画やスマイルこうぼうの計画に生かすことができた。教師側も学年の課題や，その学年で指導することが明確となったため，大変有効な手段となった。
・コロナという時事に関連した題材を扱うことで，児童が題材のもつ意味や思いを捉え，学習への意欲を保持したまま造形活動に取り組むことができた。
・授業時間内に設定できない活動・折り紙や塗り絵といった教育課程にない活動も，スマイルこうぼうの時間を確保することで実施し，児童が自然と造形的な資質・能力を高める経験につながった。
・スマイル集会では，共同製作の楽しさや達成感を味わうことができた。個人で作ったものが，１つの作品になったときの驚きや喜びは，さらなる表現意欲を高めることにつながると感じた。

・児童が「やってみたい」「何に使うのかイメージがわきそうでわかない」といった，題材へのわくわく感がある授業は，児童の表現意欲が高く，題材を通してその意欲が続いていた。
・自分の表現したいものを見つけるまでの時間が大切であることを実感した。児童の興味関心が継続する題材構成や，児童がであう材料や素材，活動場所や環境を工夫したり，友達とのかかわりや自己内対話の時間を確保したりすることが大切であると感じた。
・製作途中での鑑賞の時間は，有効であった。互いの作品をじっくりと見て，自分の作品に生かすことになった。また，共同製作をすることで，自分のつくりたいものが明確になったり，

友達と作品がまとまってよりよい作品になったりするなど，イメージを具現化するために大いに役立った。

・作品を見る楽しさを体感するには，アートカードを使った活動や，鑑賞領域の授業，普段から作品を見る環境を整備することが大切であった。作品のよさは，画一的なもではないこと，写実的なものが素晴らしいものであるとは限らないということが，児童の中で少しずつ理解できるようになり，友達の作品を認める声が多く聞こえるようになった。

・保護者をはじめとする様々な人にも作品をみてもらう機会，認められる機会は,児童の新たな表現内容への意欲付けとなり，より主体的な学びが展開されるようになった。

・「ことばであらわそう」を活用することで，児童の中にストックする言葉が増えた。特にオノマトペによる表現は，児童にとって馴染みやすい言葉になっていた。また，言葉をヒントにイメージを膨らませる表現活動も展開でき,言語活動の充実が,児童の表現活動の幅を広げる一助にもなっていた。

・教師も児童の成長を認めることのできる言葉をさがし，声をかける実践をくり返すことによって，児童の作品への見方が深まり，評価に生かすことができるようになった。

（２）課題

・指導計画を立てる際,「技能到達度一覧表」を見て，集団として習得している技能を把握しやすいが，一人一人身に付いている技能は異なる。学級の指標にはなるが，実際の授業では，一人一人の学びをしっかりと見取ることが大切である。

・表現は，他の作品も見る経験や，成長段階での児童が積んできた経験一つでどんどん形を変える。題材を扱う前から，児童の造形的な見方や考え方の芽が育っている。それは，材料集めの段階から，児童は「何に使おうか」と材料を楽しみながら収集しているという，授業の前段階でのであいを大切にすることにつながっている。完成した作品だけでなく，作品にこめられた思いをしっかり見取り，感じることも教師には求められている。

・教師の言葉は，児童にとってヒントや励ましになる。児童の全ての思いや考えを受け止め，承認することが，新たな表現意欲につながるため，効果的な声かけや机間指導を，今後も研究することが大切である。教師の声かけにより，児童の表現活動に制約がかからぬよう留意したい。

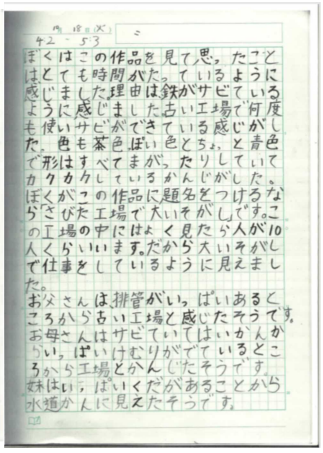
・児童の評価をする際には，製作過程の評価規準を教師も明確にもっておく必要がある。

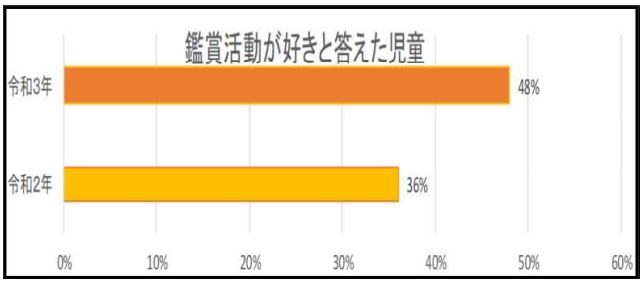
・タブレット端末を使った写真や動画の撮影は，製作途中の様子の記録にもなるので，指導体制を工夫することも大切であると感じた。

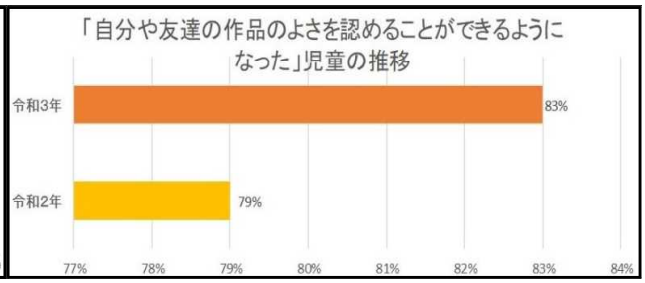
・GIGAスクール時代の到来により，１人１台タブレット端末を活用することができるので，自分の好きなタイミングで，写真を残しておくことも可能となった。図画工作科の授業におけるタブレット端末の有効的な活用法について，今後検討していきたい。

９　終わりに

表現と鑑賞の一体化を図り，相互に関した授業展開を目指すことで，児童の造形的な資質・能力を少しずつ育成することができるようになったと感じている。アンケートからも，「鑑賞活動が楽しかった」と回答する児童が，全体の12%増えたことも成果といえるだろう。その中には，作品の持つよさや面白さを感じ取ろうと，身近な美術作品についての鑑賞を自主学習ノートにまとめている児童もいる。


ぼくはこの作品を見て思ったことはとても時間がたっているように感じました理由は鉄がサビているように感じました古い工場で何度も使いサビができている感じがした。色も茶色ぽい色とちょと青色で形はすべてまが。たりしていてカクカクしているかんじがした。ぼくがこの作品に題名をつけるならさびた工場で大いそがしです。この工場の中にはよく見たら人が10人くらいいます。だから大いそがしで仕事をしているように見えました。
おゝさんは排管がいっぱいあるところから古い工場と感じたそうです。お母さんはサビていてはいかんかい。ぱいけむりがでているところから工場とかんじたそうです。妹はい。ぱいくだがあることから水道かんに見えたそうです。





そして，教師も図画工作科の授業のみならず，学校教育活動全般を通して，児童を賞賛する声をたくさんかけることができるようになった。題材に没頭する児童の真剣なまなざし，自分の思いを表現できたときの喜び，自分や友達の作品を前に見せるとびきりの笑顔など，児童の様々な表情を見ることができた。「造形的な資質・能力を高め，表現する喜びが互いに感じられる授業づくり」を目指した研究が，感性豊かに，自信を持って教育活動に向かう児童の姿へとつながるよう，今後も教職員一丸となって教育実践を重ねていきたい。